基調講演

中部大学教授
武田　邦彦氏

1943年、東京都生まれ。
1962年都立西高等学校卒業。1966年東京大学教養学部基礎科学科卒業。同年旭化成工業（株）に入社。1986年同社ウラン濃縮研究所長。1993年より芝浦工業大学工学部教授を務め、2002年より名古屋大学大学院教授をへて現在に至る。

原子力発電所への不安と本当の科学の心

東日本大震災では2万人を超える方の命が奪われました。これについて多くの方が自然災害と捉えておられます。もちろん自然災害ですが、我々科学者から見ると非常に残念な思いが致します。というのは、地震予知が騒がれ出したのは1970年、今から40年前です。松代群発地震が1960年代にあり、大変多くの地震が起きました。日本はもともと地震国で過去に多くの方々の命が地震で失われており、科学技術を生かして少しでも人の命を救えないか、というのが地震予知を始めた最初の動機でした。

そこで東海地方を重点的に地震予知の観測点にするということで、巨額の予算と人員が投入されて監視に当たりました。しかし、これは当初から完全に間違っているのです。松代群発地震が起きて地震予知をしようと思った時に直ちに東海地方に地震が来ると分かるはずがありません。なぜ東海地震があれほど話に上ったのかというと、東海地方の地震観測によって巨大な研究費を得られる機関が政府に働きかけて、東海地方に地震が来るということにしたのです。だからこれは科学の問題ではない。最初から本当にまじめに地震予知を我々の希望通りにやれば、数十年後には日本のどこかに大きな地震が来るであろうということは当時、今から40年前に分かっていました。本当の科学の心でやれば、阪神・淡路大震災も東日本大震災もある程度の犠牲者を止められたかもしれません。東日本大震災が起きる6日前からちょうど松代群発地震のような群発地震が観測されていたのです。今回、伊豆大島で大量の雨が降って多くの方が亡くなりましたが、何ミリくらいの雨が降るということは分かっていた。土砂崩れの可能性もあった。火山灰で大地も弱かった。しかし、特別警戒警報というのはある領域の広さがなければ発令しないということがあり、結局は科学が犠牲者を少なくできませんでした。こういった、本来科学がやるべきことがなされない、ということによって起こることが非常に多いのです。

東日本大震災では福島の原発が爆発しました。私は大学を卒業して45歳まで原子力の研究をし、今非常に反省しておりますが、私の若いときの考えに間違いがございました。例えば、「原子力は安全ですか」という問いに多くの科学者が「安全です」と答えます。しかし、それは本当の科学からいえば嘘です。なぜかと言うと、東京の電気を供給する発電所を福島と新潟に作っています。新潟の柏崎刈羽原子力発電所というのは世界最大の原子力発電所で、世界の原子力関係の人から見ると非常に良く見えます。しかし、「そこから300キロも山を越えてなぜ東京に電気を引っ張るのか」と聞きますと、先ほど原子力は安全だと言った同じ人が「それは危険だから」と答えるのです。「さっき安全だと答えたじゃないですか」と言うと、「それは電気がほしいから安全だと答えた」と。それならなぜ新潟でつくるのかというと、「俺の近くで事故を起こしてもらっては困る。だから新潟でつくるのだ」ということです。これは、実は今回の原発問題の大きな原因になりました。

私は原子力発電所の安全の基準づくりなどに携わってきました。そこで、「原子力発電所の安全を確保するためにはこういう改良をしなければならない」と私が言うとします。すると委員の人が「それはどれぐらいお金がかかりますか」と尋ねます。「多分1,600億円ぐらいかかると思います」「そうですか。それではやめましょう」となります。今のまま新潟県に作れば80億円で済みます。今のまま危険な原発を80億円プラスして新潟に作ることと、1,600億円の金をかけて東京近辺に安全な原発をつくるのとどっちを選びますか。それはもちろん、危険な原発を新潟に作ることです。あなたは1,600億と80億のどちらが高くつくかわからないのですか、とこのようになるのです。東京の電気をつくる原発を新潟に作るのは、屁理屈をこねればできないことではありません。例えば、原発が安全だといっても、やはり危険性があります。そのときの危険性を最小限にするためにはやはり過疎地に作った方がいいという理屈はあります。しかし、それは本当の理屈ではありません。原発がそういう状態で安全審査や安全基準がきちんと作られることはありません。これも技術の問題ではなく、科学者や技術者が持つ心、社会との関わりであります。

もう一つは、この前小泉元首相も言われたように、原子力発電所を動かせば必ず核廃棄物が出ます。現在、事故を起こした福島の原発にある核廃棄物は1,900本です。この存在は非常に大きな問題になっていて、地震であの建物が倒壊したらこの核廃棄物はどうなるのだ、爆発するのでは、東京からも逃げ出さなくてはいけないのではと言われますが、現在日本中にある核廃棄物はすでに130万本です。福島の1,900本に比べれば格段に多い。しかし誰もそれを問題にしません。130万本の原発からの核廃棄物はここら辺に隠されているわけで、もちろんよく調べればわかるのですが、誰も気付こうとはしていません。

私は行政の経営アドバイザーもやっており、ある時、行政の人に「原子力発電をやれば電気はいただけるが、同時に核廃棄物が出るのも承知である。原発の電気をいただくのであれば、同時に核廃棄物も引き取ろう」と呼びかけたのですが、誰も賛成はしてくれませんでした。「では、原子力発電所をこのまま続けるとやがて200万本を超え手に負えなくなるわけですが、どうするのですか」と聞きますと、「危険だから子供に任せる」と答えます。私は、日本の文化というのは命の継続性というものを非常に重視し、個人的な価値よりも命を継続する、自然とともに命をつないでいくという意識が強かったと考えており、子供のために、子供に危険なものは自分の世代で片付けるということが、鉄則だったのだろうと思います。しかし、現在では原発をこれほど動かして、かつ事故が起こっても継続しようとしている。そして核廃棄物はどうするのか聞くと、危ないから子供に任せると言う。自分が死んでから何とかしてくれるというような答えが返ってくる時代であります。

先ほどの立地についても、日本はすべての原子力発電所を僻地の海岸線に建てていますが、アメリカの105基の原発のほとんどはニュー

ヨークやシカゴの周辺にあり、消費地の近くに配置されています。フランスはもう少ししっかりしており、パリの電気はパリのセーヌ川上流にある2基の原発で賄っています。中部のロワール川流域はブドウ酒の産地ですが、下流にブドウ畑があり、その上流に原発が20基あります。そこでフランス人に「どうして一番大切な農業のブドウ酒の産地の上流に原発を20基も作るのか、ブドウ酒にその廃液が混ざる恐れがあるのに」と聞くと、「日本人は原子力発電所が危険だと思っているのか。危険であればどこに作っても同じだ」という答えが返ってくるのです。

一年ぐらい前でしょうか。14基の原子力発電所がある福井県の若狭湾の南に位置する琵琶湖がある滋賀県で講演しました。市民を中心に千人ぐらいが参加され、私が「琵琶湖の周りに原発を10基作れたら」と言いました。なぜなら琵琶湖周辺には地震はないし、津波もほとんど記録されていない。原発を冷やすのに海水を使う国はほとんどなく、川の水が多いが、琵琶湖は淡水だから適しています。さらに消費地の名古屋や大阪、京都に近い。するとすぐに手が挙がりまして、「先生、そんなことを言われると困ります。琵琶湖は大切な湖です」と言われました。そこで私は、「せっかく私の講演を聞きに来ていただいて、上げ足を取るようで恐縮ですが、琵琶湖は大切な湖だけど若狭湾は下らない湾ですか。滋賀県の人は優れた日本人だけど、福井県の人はそうではないのですか。私には同じ国土、同じ日本人に見えます」と言いました。日本だけが消費地の近くに原発を作らないわけです。

環境問題に向き合う科学者の精神活動

こういった問題は、現在の環境問題の中核をなしておりまして、私の見るところ、現在の環境問題、ゴミがあふれるとか、ダイオキシンが毒物であるとか、地球が温暖化しているとか、これは単に一科学者としての私の考えですが、全部間違いだと思っております。地球は温暖化しませんし、ゴミがあふれることもありませんし、ダイオキシンが毒物であるということもありません。そういうことが一般的な見解になるというのはどこに問題があるのか。例えば、ダイオキシンは自然に存在するものです。今から40年前にダイオキシンのことを人間が作った史上最強の毒物と言った人がいます。しかし人間は自然にないものを作ることができません。石油は数億年前の動物の死骸であって人間が作ったものではありません。石油からプラスチックを作る反応も、もちろん人間が作ったものではありません。自然界にないものを人間が利用するということは今までにありません。プラスチックも自然界のものであって人工物ではありません。例えば、女性の足の筋肉はポリアミドという物質で、それが筋肉として都合がいいから使われているのです。女性がはいているストッキングは石油から作ったポリアミドで、完全に構造は同じです。女性の足は人間を作っているポリアミドの上に、死んだ動物の死骸から作ったそれを履いているのです。

すべて人間の作るものは自然の中に含まれているものなので、人工物が毒物を作るということはありません。事実、アメリカ合衆国に存在しますダイオキシンの75％は山火事によるものです。ダイオキシンは木や紙や肉やプラスチックなどの高分子物質に塩があって400度から500度で焼かれると発生します。山火事で発生するのは海からの塩水が木にかかって、それが燃えるからです。だから人間は火を使うようになってから、もしくは火を使う少し前からダイオキシンの中で生活をしております。我々の日常生活で最もダイオキシンを製造するのは焼き鳥です。焼き鳥は、おいしい鶏肉に焼き鳥屋の親父が塩をかけて焼きますが、あの焼く温度がちょうど400度から500度でダイオキシンの製造温度です。従って、一方から見るとおいしい焼き鳥を作っているように見えますが、反対から見ると完全に焼き鳥屋の親父はダイオキシンの製造条件に合わせてそれを製造しているのです。そして焼き鳥の煙の中で仕事をしておりますから、もしダイオキシンが毒物なら焼き鳥屋の親父は死んでなければなりません。これだけでも分かるわけです。

私が今日お話ししたいのは、なぜダイオキシンが環境を破壊する毒物の一つになったのかということです。たいへん僭越ですが、現在の環境問題は事実としては存在しないんです。日本の環境は、皆さんが体感されているように空気や水はきれいで何も起こっておりません。南極の氷は今年、観測史上初めて最大の面積になりました。南極の氷が溶けていることもありません。しかし、皆さんが地球は温暖化しているのでは、今年の気象は異常では、と心配される原因は何かというと、実際に自分の身で触れ、目で見ていないからです。そういう噂をテレビで聞く。それによって環境問題になってきます。それは非常に大きなお金にもなるし、研究テーマにもなりますので、人間の心の幻想が映し出した蜃気楼のようなものです。1990年から日本人では一人も環境によって病気になった人はおられません。従って我々は何もないところに向かって日々格闘しているわけです。

なぜこのようなことが起こるかというと、現在の科学者も特にそうですが、ほとんど精神活動がないからです。精神的なことに時間を割くこともありませんし、深く考えることも、本を読むこともありません。そういう中で仮に温暖化とか、ダイオキシンとかという問題を考えますと、妄想のごとくあらぬ方向に行ってしまうのです。そして間違いを次々と言ってしまうのです。お盆の頃に資源の先生方にお集まりいただきました。その中には元の資源学会長もおられ、私自身も名古屋大学の資源の教授でした。資源は枯渇するといわれるが、大体どれぐらい持つのだろうかということについて意見をいただきました。石油や石炭、天然ガスは昔の生物の死骸で還元炭素資源と言うのですが、人間の手がすぐに届く範囲で一番短い評価をした先生があと2万5千年でした。一番長い先生が500万年でした。これはテレビが何年と言おうと、それとは無関係です。学問の世界です。だからダイオキシンもそうですが、本当に石油などの資源が枯渇するかというと、私は資源学者として枯渇しないと考えています。つまり、現在の人間の活動は自然に対して極めて小さくて、到底自然を破壊するような力はありません。非常に部分的に、限られた期間、ちょっとだけ悪さをすることはあります。庭に汚物をぶちまけるようなことはできます。それは太陽の光で一年も経てばなくなるでしょう。そういったことが存在することは確かですが、せいぜいそれぐらいしかできません。地下にある資源は人間の活動に対して膨大に大きいのです。このように、現在の環境問題というのは本当にどこにあるのか、何が我々に直接的に被害をもたらすのかは、全く別の視点でぜひ考えていただきたいと思うのです。

先ほど松長座主のお話を聞いておりまして、私の方からはこんな風に思います。日本は本当に不思議なところで有史以来、ペストなどの大型の流行の病気がほとんど起こりませんでした。それに対してヨーロッパは、日本よりも衛生的であるはずの亜寒帯に属しながら、繰り返し疫病に遭います。それは日本人が自

然と一体となって命を支えてきたからだと考えます。一方、ヨーロッパは自然と敵対関係にあるので何でも自然の前に押しやり、そういう結果が現れるのです。私の考えでは、日本人としての正常な精神状態にあれば、人間に改善の心や反省する心があれば、それだけで日本の環境が悪くなることはないと思います。それから科学者としてどのように考えるかですが、例えば、川は山頂で誕生して最初はチョロチョロと流れていますが、そのうち成長して川のまわりに木が生えて鳥が鳴き、だんだん山が平らになって緩やかな川になり、やがて川はなくなります。川も、山も、石もそうです。我々も誕生して成長して成熟し、老衰して死に至る、これがもし命であるというのであれば、言うまでもなく人間も動物も植物も石も川も山も、50億年前にできた太陽でさえこれから80億年したら死に至ります。それでは何をもって命と言うかというのは、科学的にはまだ分かっておりません。たぶん、全部に命があるのではないか。我々は動きますが、それは命とは関係ありません。ただ反射的に動いているだけです。今日ここに呼ばれたから来たわけで、私の意志がどこにあったかはよくわかりません。

このように科学としての私の考え方は多くの方々と少し違うかと思いますが、今日ここで講演の機会を得まして、科学というものはほとんど間違っていて、恐らく一万年後の私は全然違うことを言っているはずです。私は名古屋大学で物理を教えていましたが、現在では物を離すと落ちることを「万有引力」と教えています。試験で間違えると×をつけます。しかし、500年前の先生はどう教えたかというと、地下で悪魔が引っ張っていると教えました。では「万有引力」が正しいかというと、今は非常に疑問が持たれていて、恐らく100年後にはその説明はなくなると思います。つまり我々は本当に片時の事実だけを言うことはできますが、系統だった事実を述べることは科学にはできないのです。

環境問題も時々間違えますが、これは当たり前で、我々科学者はほんの一部しか分かっておりません。今私の目にライトが照らされていますが、あのライトの光は50年後に私が失明する光かもしれません。このことがある意味での環境問題をもたらしますが、やはりこれは著しく精神活動が少なく、ほとんど心のない科学者たちが問題を起こし、さらにそれを拡大し、それによってみんなが右往左往して苦しんでいる。そういう現状ではないかと思います。非常に明るい将来があると思いますが、それには我々がどのように人生とか自然とか共生とかを考えていくのかということが大切です。この前、科学の研究会である人が「人間が地球の温度を変えることが悪い」と言うのです。私は「人間が地球の温度を変えるのと、太陽が地球の温度を変えるのと何か差はあるのですか」と聞きました。その人は鳩が豆鉄砲をくらったみたいにキョトンとしていました。太陽によって地球の温度は13万年ごとに何十度も変わるわけです。もちろんそれは違うかもしれません。しかし、それが違うかどうかということも我々科学者は今分からないのです。今日、「宗教と環境」というシンポジウムをもっていただいたことは本当に素晴らしいと思っております。ぜひ、宗教の方から、哲学の方から、我々科学の方にいろいろ教えていただきたいと思います。

パネル討論

「共生」と環境倫理学の課題

［コーディネーター］
竹村　牧男氏
（東洋大学学長）
1971年東京大学文学部印度哲学科卒業。同大学院人文科学研究科修士課程修了。博士（文学）東京大学。文化庁宗務課専門職員、三重大学助教授、筑波大学教授を経て2002年より東洋大学教授。

竹村：ただいまご紹介いただきました竹村です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

今日は初めに、松長座主猊下からたいへん深い内容のお話がありまして、感銘を受けました。そして基調講演として武田先生から、科学というものの性格、科学者というものの性格、あるいは科学者の妄想のようなことについて非常に興味深いお話をいただいたと思います。

本日のテーマは「宗教と環境―自然との共生―」ということになっております。宗教的な立場から、さらには仏教的な立場から、人間の住むこの世界―国土と仏教では言いますが、その国土をどう捉え、人間と自然環境との共生をどう果たすかということが全体のテーマになっているかと思います。

環境問題といいますと温暖化が注目されていますが、それだけではありません。これは武田先生のお立場からすると全くないことだということになるのかもしれませんが、従来いろいろと指摘されているところによりますと、水の汚染の問題や水資源の問題、土地の汚染の問題、有害化学物質の問題、大量発生の廃棄物の問題、特に放射性廃棄物の問題、酸性雨や開発途上国の公害問題、海洋汚染、さらには社会的な問題でもあるかと思いますが人口の増大や大量破壊兵器、テロの問題などさまざまな問題があるわけです。そういう問題が提起されたことをきっかけに、人間としてどのように生きるのか、人間としての生き方が問われてきたことは事実だろうと思います。その中で人間と環境との共生、人間も生き、そして自然もその本来のあり方を発揮していくにはどうすればよいのかということが課題になっていると思います。

共生という言葉を少し振り返ってみたいと思います。皆さんもすでにご存じだと思いますが、共生という言葉を最初に言われたのはおそらく増上寺の法主でありました椎尾弁匡先生ではないかと思います。椎尾弁匡先生は1922年（大正11年）に共生会運動を起こされました。浄土宗ではいつも「四弘誓願」を唱える最後に、「共生極楽成仏道」（共に極楽に生じて仏道を成ぜん）という句を唱えていること、あるいは善導の『往生礼賛』に「願共諸衆生往生安楽国」（願わくは諸々の衆生とともに安楽国に往生せん）、共に極楽浄土に往生しようという言葉があることから、「共生」という言葉を取り出しまして、「ともいき」をめざす社会運動につなげられたわけです。

今日、共生という言葉の内容として、おそらく代表的なものと思われるのは、『岩波哲学・思想事典』で東大の法哲学者の井上達夫先生が執筆された「共生」の項目に、次のようにあるものです。

「この言葉は生態学では寄生の対概念として用いられるが、現代日本の思想界では「人間と自然の共生」、「多民族・多文化の共生」、「障害者との共生」、「男女の共生」など種々様々な文脈で使われている。調和や一体性の幻想が崩壊し、隠蔽され抑圧されていた対立が噴出する状況下で、新たな共存枠組みを模索する問題意識が根底にある。民族差別・障害者差別・性差別・文化摩擦などの文脈で共生が語られるとき、これは明らかだが、環境問題の文脈での共生論も、途上国と先進国との対立だけでなく、動物の権利や自然の権利と人権との対抗、現世代と将来世代の利害衝突など、従来無視されてきた新たな次元の対立に焦点がおかれている。現代的意味での共生は、自他が融合す

る「共同体」への回帰願望ではなく、他者たる存在との対立緊張を引き受けつつ、そこから豊かな関係性を創出しようとする営為である。」

このように書かれておりまして、決して自他が融合するというのではなくて、対立緊張を引き受けつつそこから豊かな関係性を創造していく、これが共生ということだといわれております。自然と人間との間の共生にもそのような関係性を見出していくことが課題なのかなと思います。

環境問題があるとして、それを解決していくには、一つは科学技術で省エネ技術や代替エネルギー技術などを開発しながら問題を解決していく。科学技術の発展が科学技術の矛盾を解決していくということもあるのだろうと思います。それから社会全体として循環型社会—これはコストの問題を考えていかなければならないのでしょうが、社会システムにおける無駄等を省いていくということも考えていかなければならないでしょう。そしてまた、一人ひとりのライフスタイルを確立していくことも課題になってきます。こうした事柄のためには、一つの物の見方・考え方といいますか、哲学といいますか、根底に自分はどのような生き方を選んでいくのかという自覚、主体性が必要になってきます。先ほど武田先生も、科学者は精神活動がないとおっしゃっていましたが、ある意味ではどのような思想を根底に持って生きていくのかということが、今、非常に問われているのではないかと思います。

このことに関連して、「環境倫理学」という学問が実際にあります。松長座主猊下がさきほど世代間倫理ということをご紹介されておられましたが、加藤尚武先生（日本での環境倫理学の第一人者）は、環境倫理学については三つの問題があると言われています。一つは自然の生存権の問題。そこに木が立っているとして、人間が道を通すために人間の都合で木を切ってしまう、ということが果たしてできるのだろうか。木の生きていく権利というものはないのか。単に人間のみならず、自然物もまた最適の生存への権利を持っているということを、どう考えていくのかという問題です。

もう一つは、先ほど紹介されました世代間倫理の問題です。現在世代は未来世代の生存と幸福に責任を持つということ。どのようにしてその責任を果たしていくのかというような問題です。

もう一つ、地球全体主義ということを言われています。行動や意識の決定の基本単位は個人ではなく地球生態系そのものである、地球生態系全体の中で自分の生き方を選んでいくということです。こういうことが「環境倫理学」のテーマになっていると言われています。これらについて、宗教ないし仏教がどのように関わっていくのかということは、改めて考えてよろしいことではないかと思います。

こういったことにつきまして、パネル討論で話し合っていただければと思っております。それでは武田先生、よろしくお願いいたします。

武田：現在言われている環境問題は、私から見ますと科学者が精神活動のない中で幻想として描いた架空のものであると思っております。これを宗教・哲学という意味から大いにアプローチしていただくためには、科学者の作りだした幻想に基づかず、全く別の視点から我々に教えていただきたい、それが非常に重要なことではないかと思います。

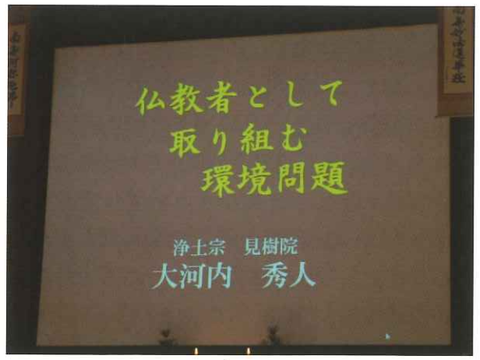
竹村：武田先生、わかりました。ありがとうございました。それでは、大河内先生にご発表をお願いします。

志ある
コミュニティーづくり

大河内：皆さんは研究者ですが、私は全くそういう立場ではなく、ただやみくもに活動しているという立場ですので、同じレベルで考えていただくより気楽にお聞きいただければと存じます。私が仏教者として環境問題に取り組む理由は、仏教の教えの縁起にあると思います。命の正体、あるいは天地の真理というものが仏教では縁起という言葉で語られます。すべてのものが結び合い、繋がり合い、無関係なものなど何もない、すべてが自分を生かしめ、また自分が生かしめるものであるというところからスタートしています。そして、若いなりに環境問題やいろいろな社会問題に僧侶として関わらなければならないと僧籍を取った時点から思っていたのですが、現在の活動の原点になりましたのは、国際協力のNGOに参加したことです。全日仏の小林正道理事長にブータンなどに連れて行っていただいたのが私の最初の途上国体験です。カンボジアの難民・開発問題やパレスチナの紛争や難民問題、タイでの救済事業などに関わってきた中で、私が感じたのはまさに縁起の世界です。私が始めそういう活動に参加したのは、困っている人、苦しんでいる人を助けたいという思いからです。

［パネリスト］
大河内　秀人師
（浄土宗見樹院、寿光院住職）
慶應義塾大学法学部、大正大学仏教学部卒業。浄土宗見樹院及び同宗寿光院住職。

日本の高度経済成長と一緒に育って何の不自由もなく暮らしてきたのだから何かしなければならないのだろうという「上から目線」で最初関わっていたのです。しかし、実際にそこで苦しんでいる人の状況を見て、その苦しみがどこからくるのかといろいろ辿っていくと、実は私たちは助ける前に、私たち自身が地球上のさまざまな人たちの生活を壊したり、あるいは命を脅かしたりしていたのではないかということを感じました。



それに対して、仏教者としてのアプローチは、問題に出会って原因を追及していく、原因を丁寧に見ていく、そしてその問題を発生させているメカニズムをしっかりと把握することで、それによって私たちは正しい活動ができるわけです。それから、向かう先はいったい何なのだろう、豊かさや幸せとはいったい何なのだろうと、実際に縁起の世界の中でみんなが幸福に生きられるという状態を私たちはどのように設定していくべきなのだろうということを考える。そういうプロセスを、活動を通して学んでまいりました。

そして今実際に、さまざまな問題の原因の多くは、人災によって作り出されるものだと感じております。人災を引き起こす根本的な原因は私たち自身の中にある貪・瞋・癡の三毒です。経済成長をしたい、お金を儲けたい、少しでも稼ぎたいという気持ち。その根本には貨幣経済という仕組みに支配されている私たちがあるのではないか。また戦争などさまざまな問題を起こす原因として、最近でいえばヘイトスピーチなどによって、私たちの心が掻き乱されているのではないか。そして同時に、私たちは本当のことを知らずに、あるいは知ろうとしないで、自分の聞いたこと、見えたこと、あるいは自分の都合のいい情報だけを取捨選択しているのではないか。例えば、今回の原発も嘘と隠蔽というものが私たちの不幸をさらに大きくしているのではないかと感じるわけです。

活動していく中で感じたことは、仏教者として目指すところは悟りですが、私たちが目標としているものは縁起の世界を悟ること、そしてまた縁起の世界に生きる自分自身がいかに生きるべきかをしっかりと悟る大切さです。今の自然にしろ、社会にしろ、それによって生かされ、あるいはそこに関わっている自分がいる。多くの問題は人災で、人が紡ぎ出すわけ

ですが、なおかつそのすべてのものと私たちは繋がり合っているわけですから、それを解決する可能性と未来に向けての責任があるということを感じました。

そしてそれを現代的に考えると、宗教とは関係なく、とりあえず自分たちの問題を自覚して自分たちの責任で取り組んでいくのが市民社会の市民だと思っています。市民社会や市民という言葉を嫌いな方も多いのですが、私がいろいろな世界のNGOの方とも活動してきて感じたのは社会を担う自覚です。そういう人生を歩む人々を作っていくのが、おこがましい言い方をすれば、寺院の住職としての教化の目標と考えています。実際に私が一緒に活動しているさまざまなNGOでは、いろいろな問題に気づき、出合った者が自分の責任としてしっかりとコミットしています。単に困っているから助けてあげる、お金や物をあげるということではなく、原因や仕組みにしっかりと関わっていくという次元で取り組み、どこへ向かっていくのかというビジョンを共有することが求められます。そして最終的に作り上げるべきものは持続可能な支援のシステムであり、それが仏教者としての心に根ざした菩薩行の実践ではないかと私は考えました。

ただ、海外のことにずっと関わっていてよくよく考え、自分の足下はどうだったんだろうと翻ってみますと、あまり何もなかったわけです。それで私は地元の東京都江戸川区のグループに参加しました。それが大変大きな次の段階のスタートになりました。そのグループは、反戦、脱原発などをテーマとした緩やかなネットワークで、アルミ缶の回収もしていました。江戸川べりで行われる大規模な花火大会の翌朝、大量に出るアルミ缶を拾って来て活動資金にしていたのです。ところがアルミ缶の価格が年々落ちていったのです。どうして貴重だといわれているアルミの価格が下がるのかを調べてみると、背景に生産国の生活困窮と自然破壊があることが分かりました。国際援助として流れていったお金、いわゆる金貸し援助がそこの地域の資源を収奪して、なおかつその国を重債務国に落とし、返済を優先させ教育や福祉がカットされ弱い人々のところにしわ寄せが来るといういわゆる構造調整という問題に気が付きました。実際に私も、東南アジアなどの森林破壊などの現状を目の当たりにし、人々が農村から安い労働力として都会に吐き出されるという現実、国際経済の、特に援助に絡んだ経済の仕組みがあったのです。

それでは、人々を苦しめている元のお金がどこから出ていたかというと、円借款といわれる日本のODAあるいはアジア開発銀行や世界銀行による金貸しの原資が日本の財政投

融資であり、元はと言えば私たちの郵便貯金とか簡易保険から出ていたということを知りました。自分たちが預けたお金がそういう形で人々を苦しめることに使われるのではなく、未来のために、人々のために役立つ形で使いたい。大銀行にしても郵便貯金にしても、使われ方にはかなり疑問ある。それだったら自分たちで銀行を作ろうということで、NPOバンクとして「未来バンク」が設立されました。

私は正しい志のあるコミュニティを育てて支えていくというのがお寺の役目だと思っております。もちろん地域のグループもそうですし、檀信徒の人たちも生き甲斐を持って未来に繋がる世界を、天地宇宙の縁起と繋がる中で、しっかり生きられる活動をしていきたいと思いました。一昨年、浄土宗でも行われた法然上人の八百年大遠忌のプロジェクトとして、見樹院という寺の建て替え計画を檀信徒の人たちと一緒に進めました。20年来の懸案でもあり、大遠忌のプロジェクトとして取り組んだのです。そこで八百年大遠忌というのは何だろうと改めて考え、浄土宗を含めて鎌倉仏教というのは念仏だけでなく、お題目を唱え、座禅をすることも含めて、人々が自身で自分の生き方や未来を決めていく、人々が主役の社会を目指していたのだと捉えました。また、見樹院は、徳川家康の母お大の方の菩提寺・伝通院の塔頭で300年以上の歴史があるのですが、残っている檀家は100軒足らず。皆さん本当に大事にしているのですが、食えないと言われている状態で、少子化が進みこれから先、自分たちのお墓がどうなるのだろうと皆さんが心配される寺でした。それをみんなで乗り越えていくような活動をしようということを目指しました。そこで私たちが選んだのは、東京という都会の中で、実際に自然や縁起の世界を体で感じられる生活空間を作ろうという事業です。

自分が今食べたり、使ったりしているものがどこからきているのか、なかなか想像しにくいこの社会の中で縁起を実感できるような暮らしをしたい。また、化学物質などのアレルギーに苦しんでおられる方が私の周りにもおられたのでシックハウス症候群やアトピーなどに悩んでおられる方も安心して住めるような場所にしたかったのです。そこで化学物資を使わず天然素材だけの建物を作ろうと考えました。もう一つは、みんなで作っていくという方式を大切にしました。100年間の定期借地権の分譲マンションを併設し、で建築費のかなりの部分を出すという形の等価交換プロジェクトです。特殊な仕様で建物自体は300年の耐久性があり、100年後にはお寺に無償で譲渡していただく。100年後、新たに家賃設定をしたり、もう一度販売したり、他の活動に使ったりできるというプランです。建物は基本的には鉄筋コンクリートですが、そこに木をふんだんに使っていて、日本の森林を適正に活用し、持続可能な地域と地球を築いていこうというコンセプトです。そういう生き方をすることで未来に繋がっていると実感できることが本当の救いになっていくのではと思っています。

私たちの天然素材だけの住宅は、日本の山林の木材だけを燻煙乾燥して使います。そしていろんな工務店さんと提携して建物を増やしていくことによって日本の山林の価値を高めていこうと考えています。そもそも私がこの活動に入った一番のきっかけは、マレーシアで熱帯雨林がどんどん破壊され、そこに生活している人たちが追い出されているという実態がありました。そこの立派な木がどんどん切り倒され、それが日本に運ばれてコンクリートパネルや安い家具に使われてどんどん消費されているのです。実際に日本の企業は東南アジア各国の森をどんどん丸裸にしており、そこで人権侵害やさまざまな事件が起きています。一方、日本の山林は、そういった安い木材のために全く使われずに放置されている。そのために山がどんどん荒廃している状況があるわけです。私たちは昔のように山で暮らせるようにしたいというのが一つの目標なのです。

また、先ほど申しましたシックハウスという健康被害の問題もあります。実際に人々が化学物質を体に入れてしまうのは、食べ物より空気からの方が多い。空気も、外より室内で吸い込んでしまう方が多いのです。だから室内の環境を整えるということが非常に大事で、安全なものだけを使っています。森を守るための下草刈りも日本ではコストが非常に高いので、私たちは牛を山に放して下草を食べさせるという方法をとりました。また、「皮むき間伐」にも取り組んでいます。皮だけむいて木が立ち枯れると数ヶ月後には中からどんどん乾燥して軽くなるので、素人でも伐りだせる状態になります。

私たちとっては、建物もそうですが未来バンクなどを通じて、自分たちの手元で縁起の世界をコミットしていくということを基盤として

います。寺が行政でも営利企業でもない人々のコミュニティの基盤として続いてきたように、建物自体をみんなで運営していく。同じように高齢者のグループハウスや子どもたちの居場所事業などを、地域の中でコミュニティの運営として進める活動に取り組んでいます。これから先、いろいろと社会の不安などもあると思いますが、みんなが社会や環境、そして未来につながる実感を持って、自分たちが主体となり、お上や大企業にぶら下がるのではなく、下から積み上げる社会を、目指しています。

竹村：大河内先生、ありがとうございました。

大変すばらしいお話だと思いました。情報に惑わされずに、現実にある苦を見つめるというところから、問題への対処が生まれてきますし、そして菩薩道あるいは市民のコミュニティ形成への実践が呼び起こされてくる。具体的に未来バンクの設立とかシックハウス対策とか高齢者のグループハウスとか、さまざまな実践をされていて、その実践に裏付けられたご発表だったと思います。ありがとうございました。

続きまして村上先生、ご発表をお願いします。

お大師さまからの視点

[パネリスト]
村上　保壽師
（高野山大学名誉教授、
高野山真言宗正覚寺住職）

1967年東北大学大学院文学研究科修士課程修了。東北大学文学部助手、山口大学教養部教授、1990年高野山大学密教文化研究所教授、1995年高野山大学文学部教授に就任。1995年東北大学博士学位取得、2008年高野山大学名誉教授に就任。

村上：武田先生のお話によりますと、現在の環境問題は精神性の乏しい科学者が作り出した幻想だということでした。確かにそういう事実もあると思います。しかし、全部が全部そうだとは言えないのではないか。確かに大きな影響を及ぼしている。人間だけではなくて、他の動植物に影響を及ぼしているという、人間の作り出した環境問題がやはりあると思います。その辺りのことは科学者ではない私どもに確実な資料を出せと言われても困るのです。その時は武田先生がそう言われることに対して、科学者がそんなことはないと言って科学者で決着をつけてもらわないと私どもとしては何ともしようがありません。

ここで「宗教と環境」という話をしますが、今環境がどうなっているかという問題をメインに考えるのではなく、そもそも宗教と環境という問題を、宗教によって環境の位置づけや見方が違ってくるのではないかという視点から考えてみたいのです。自然環境が最大の環境だと思うのですが、自然の力というのはものすごいわけで、確かに武田先生がおっしゃるように、人間が多少ゴミを出したとしても大自然から比べるとたいしたしたことはないわけで、自然のものすごいエネルギーを人類は地震などで何度も経験しています。そういうことを考えた場合、それをどのように見るか。自然に対してもうかなわないから頭を下げてしまおうというのか、いや、それでも自然を征服し、管理していくのだというのか。それは宗教の考え方によって違ってくるのではないかと思っております。そこで私は環境の問題、自然との共生というものを宗教の側面から捉えていきたいと思っております。

まず、「宗教と環境—自然との共生—」をどういう視点から見ることができるかを考えてみました。一つは、環境が宗教のあり方や特徴に及ぼす影響という視点から宗教と環境との関係、そこに出てくる問題を見ることです。特に自然環境が宗教に与える影響とは、環境によって宗教や文化の形が違ってくる、環境が宗教や文化を育てるということです。和辻哲郎がその風土論の中で、砂漠の文化とモンスーンの文化という形で砂漠地帯とモンスーン地帯の宗教や文化の特徴をあげて論じておりますが、その考え方はまさに自然環境が宗教なり文化なり、それに伴って道徳意識を規定しているということです。

もう一つは、宗教が環境をどのように位置づけ、意味づけているかというところから両者の関係を見ることができます。どう位置づけるかで二つの方向性が見えてきます。一つは宗教の方が自然界の秩序とかリズムとか原理とかに普遍的なものを見出す方向性です。もちろんその中には生老病死という現象も入っている。あるいは豊かな恵みを与えてくれる自然、厳しい生活を押し付けてくる自然、そういういろんな自然の中に自分の、あるいは人間の生き方やあり方を見ようとする。そういう意味では教えの本質を自然に見るということです。自然界に対して人間が謙虚に頭を下げているという態度になろうと思います。もう一つは、環境をどのように位置づけ、意味づけているかにおいて、宗教が自然界の秩序とか原理とかリズムとか法則とかいうものに教えの本質を見ていない方向性です。自然界を従属的に捉え、どちらかというと相手にしていないというか、むしろ支配しようとする。そういう支配的な目で自然界を見ている宗教の考え方があるかと思います。

「自然との共生」という副題を考えた場合にも、この二つの視点は有効な捉え方ではないのか。共生という意味を取り出してくる上においても、宗教と環境との関係で、環境が主体となっている側面と、宗教が主体となっている側面の二つをしっかり捉えねばなりません。まず自然環境が人間に及ぼす影響から共生ということを考えていく場合、自然環境の方に力があります。人間が自然環境の中で生き延びるためには、それに負けないエネルギーを使わなければならない。生き延びるために自然に手を加える、あるいは自然を押しとどめる、あるいは人間自身が新しい力を作り出す。そういう自然に相対している態度や能力が人間にあるのです。それとの共生が問題になってくる。自然が主体になっておりますので、そういう自然の中で生きていくということが共生という意味になってきます。もう一つは、自然を支配しようとするのではなくて、自然の秩序やリズム、原理、法則というものに素直に従っていくという生き方があります。これが自然との融合というか一体化、同化という思想を生み出してきます。自然の中に教えを見るということですね。自然と対抗することはなく、むしろ人間が自然に従って自然の命、エネルギーを共有する。共に生きることです。生きている自然—腐った水は飲めないわけですから、腐った水を何とかして生きている水、命のある水につくりかえなければならない。河川の問題などが出てくると思うのですが、命の水を「いただいている」という発想が共生の思想の中に出てくると思います。

お大師さまの視点からこれについて考えてみますと、お大師さまは書物の中で、自然の言葉「五大六塵」に如来の知慧を見られ、自然と

いうものを「物質ではなくて、命のある環境——物質環境ではなくて生命環境だ」と言っておられます。物ではないのです。先ほど松長猊下のお話にありましたように、「一切衆生悉有仏性」といいまして、あらゆるものが仏性、心を持っている。日本的な発想で言うならばケ（気）やタマ（霊、魂）ですよね。そういうものを持っている。もののけです。それが自然環境であり、単なる物ではない、素材ではないのです。そういう考え方がお大師さまの視点から出てくるわけであります。

自然界は、あらゆる生物が生命を維持しようとします。そして子孫を残そうとしています。

種の生存と発展、生命の維持、これは生物である限りは絶対です。これがまさに本能です。他から見るとものすごくエゴイズムに映ります。自分の種のために他の種を食わなければいけない。食物連鎖がそうです。そのエゴイズム、この地球上のさまざまな生物のぶつかり合いが全体としては一つの秩序立った世界を作りだしている。動植物は、死んで、枯れて、腐って土壌に戻っていきます。一本の木が枯れて土壌に戻るまでにたくさんの動植物たちがその木を食いつくしてくれる。そういう循環です。再生です。さらに、あるものの死によって自分が生きている。あるものの死によって他のものが新しい生を受けている。そういう循環の世界、再生の世界です。自然界の秩序や原理は、意味を持った命の繋がり、関係性であり、これが生命環境の意味だと思います。お大師さまの視点から言うならば、そこにひとつの定義が生まれてくるのではないかと思っております。

従って、「自然との共生」というのは、一つは生きようとする意志です。そのエゴイスティックな環境とともに生きるということ。お互いにぶつかり合いながら生きているということです。二つ目は、自然界の命の繋がりを共に生きているということです。関係性を生きている。一つの命が単独に生きているのではなくて、命の繋がりを共にしているのだということなのです。それが共生の意味ではないかなと思います。

そして宗教は、環境とか共生とか自然とかに対してどのように立ち向かっていくかといったときに、一つは人間のエゴイズムの限界を知るということですが、ここで言っているのは自然を支配するということです。自然を支配し、管理する。そういうエゴイズムに限界があるということを自覚させる。もう一つは、自然が物質環境ではなくて生命環境であるということを説き続ける必要があろうかと思います。生命環境とはあらゆる生命の存在に価値を置くということです。先ほど言いましたように、共生—命の繋がりを共にするということを説き続けることでもあります。宗教というのは本質的には祈ることにあると思いますが、それとともに説き続けることでもあると思います。

自然エネルギーの将来的な課題

竹村：村上先生、ありがとうございました。先生はまず、自然と宗教とが相互に影響を与えるという双方向的な関係を分析されまして、そのあと生命主義的な自然観の重要性、それから循環的な命の繋がりの認識、こういうものが非常に重要であること、エゴイズムを克服し繋がりを尊重していくことが大事だということをご発表いただいたと思います。

さて、武田先生、まず大河内先生のご発表に何かコメントがありましたらお願いします。

武田：簡単なことを一つ。これは科学の見方ですが、最近、自然エネルギーが何か環境にいいように言われることがあります。水力発電所は物理的にはどう見えるかと言うと、太陽の光が海水面を照らし、そのエネルギーで水が蒸発して雲となって流れて山に雨を降らせます。太陽のエネルギーがポテンシャルエネルギーに変わり、それで川が流れます。この川の流れるエネルギーで多くの生物、魚、木々、砂利というものができるわけです。ところがある時、人間が川のエネルギーから電気を取ろうと思ってダムを造ります。水力発電所は当時、非常に環境にいいものだと言われていました。ダムを造るときに公聴会を開きますが、公聴会に呼ばれる人はみんな人間であります。私はそのとき、公聴会には下流の魚のお母さんを呼べと言っておりました。たぶん下流の魚のお母さんは、「私には二人の育ち盛りの子どもがいる。上流に水力発電所を造ったら私たちの二人の子どもは死ぬだろう。あなた方はそれによってテレビを見ることができるからいいだろうけど、私は子どもを失う」と言うでしょう。自然のエネルギーを使っているのは人間だけではありません。

近ごろ環境にいいと言って太陽光発電をしています。太陽光発電というのは、自然が使っている太陽を人間が電気にすることです。佐世保市の市長さんが私の名古屋大学時代にご依頼に来られ、「議会が太陽光をやれとうるさいが、本当に良ければやる」ということで、二年間研究を致しました。その結果、佐世保市の電力の8%を太陽光発電に変えたら、市内の絶滅危惧種を中心とした動植物が死滅することがわかりました。それは当たり前で、太陽光というのは人間だけの存在ではありません。風力発電もそうですね。風のエネルギーを利用して生きている一番大きなものは木です。樹木というのは葉っぱの表面から風が熱を奪うことによって生きております。これは箱根駅伝で選手たちがランニングを着て走っているけど寒くないというのと一緒で、活動するには必ず熱を除去しなければいけませんので、木々は風の量に従って生えております。もちろん鳥が飛んだり地面が乾燥したりするのも全部風のエネルギーです。風のエネルギーを人間が取れば、必ず風下は木々が枯れ、地面が湿気るわけです。我々が自然からエネルギーを取ればいいじゃないかと言っているのは自然に何もないときだけで、私たちが自然の中で生きている以上、風力発電所を造る時には、必ず鳥にも木にも聞いてみなければいけないのです。

私は仏教を知りませんが、他者を思いやるというか、自分の立場を魚のお母さんに置き換えてみるようなことが、科学の進展には非常に大切です。その実例が二つありまして、一つは石炭の利用です。今から約200年前に産業革命が発達したあと、樹木を切って燃料にして蒸気機関を動かしていました。たちまちイングランド、ヨーロッパ、さらに後にはアメリカの樹木ほとんど丸坊主になります。そこで、現在生きている生物より死んだ植物を使おうと石炭に目がつけられました。石炭の中には硫黄とかリンとかいろいろあって難しかったのですが、一応それを克服して石炭を使えるようになります。それが200年前です。100年前になると今度は動物を殺すのはどうかという疑問がわいてきます。当時、油は全部動物に頼っており、例えばアメリカのペンキを塗る油はラックカイガラムシという虫を一年に十億匹殺して造っていました。それはかわいそうだと代わりに使われたのが石油です。これは昔の動物の死骸です。石炭は昔の植物の死骸です。従って、現在の文明は植物や動物を殺すことなく、我々がある程度の光だとか暖房とかを得られる社会です。

ところが最近になって、バイオエネルギーが出てきました。バイオエネルギーは生きている生物を殺して得るものですから、我々がかつて生きているよりは死んでいるものの方がいいと、せめてそれで何とかしのごうと思っていた文化がまた元に戻ってきた。我々が太陽光も水力も風力もできるだけ使わずに、人間としての知恵を働かせて地下数千メートルに眠る燃料を使わせていただくということが、現代科学の一つの到達点です。自然というも

のを考えるときに、科学がアドバイスできるとしたらこれぐらいですが、そういう点では、現在の環境問題は本当に自然との共生を目指しているのだろうかと、非常に疑問があります。温暖化についてCO_2の削減がいわれていますが、地球ができたときには空気中は全てCO_2でした。現在、火星も金星も95%がCO_2ですが、地球に

は95％のCO_2を使う生物がいます。命が生まれ、命がCO_2を使って今0.04％まで減少してきています。もしも、この地球上に生物が永続することがいいのなら人間がCO_2を出し続けなければいけません。かつてCO_2を抱えたまま地下に眠っている石油、石炭を燃焼させて再び地上にCO_2を戻すという行為が、CO_2の排出です。そう意味で、どのように物事を考えて今後、科学技術をつくっていくかということは、難しい課題が非常に多くあると思います。

竹村：武田先生のご持論だと思いますが、科学は決して何も分かっているわけではないのだということですね。科学技術はどうしても試行錯誤でやっていかざるを得ない。成功したものもあるし失敗したものもある。成功したものはさらに続けていくということになっていくのだろうと思われます。

では大河内先生、何か応答はありますでしょうか。

大河内：武田先生のお話で、太陽光が生命を殺すということについて具体的に聞かせていただきたいのと、村上先生の自然界と生命の繋がりということがお話にあったのですが、大きな繋がりの中から一つひとつの命の大切さに結びつくようなお話をお聞きできたら。

武田：屋根に光が当たると、光はどこにいくかというと、約30％は反射していきます。その全体のバランスで生物が光を受けております。仮に、非常に高効率の太陽光発電を屋根につけますと、屋根からの反射光はなくなります。つまり、光を電気として人間が使った分だけ地表における光の全量が変わります。それが熱になる場合もありますから、そうすると暖房を余計にかけなければなりませんので、結果的にはほとんど同じになります。ですから、地表に到達する太陽の光をどのように考えるかというところが非常に難しい。太陽光発電を現在の日本のエネルギー事情に合わせますと、日本の生物は全部死に絶えるだろうと思います。これはどういう関係かと言うと、もしも現在の日本のエネルギー消費を日本の森林で賄うとしますと、一回切ったら20年後にまた全部切り、また20年後に全部切りというサイクルになります。自然の生産しているエネルギー（18世紀までのエネルギー）と現在我々が使っているエネルギーは非常に大きな差がありまして、それを補うために石油や石炭を使ってきた。しかし、ここで自然エネルギーに頼れば、自然はたちまちのうちに破壊されるのは間違いないだろうと思います。少なくとも科学としては自然エネルギーを使ったらどれぐらい自然が傷むかということを多分あまりご覧になったことはないと思いますが、それが今の環境の議論には大きな問題を残していると思います。

竹村：太陽光発電は必ずしも屋根の上だけでもないと思うのですが、原野のようなところにソーラーを設置したりした場合はどうなのでしょうか。

武田：砂漠はなぜ砂漠としてあるのか。砂漠に太陽電池を置けばいいじゃないかという話がありましたが、砂漠は人間のためにあるのではないのです。地球環境全体の存在として、赤道から数100キロ離れた位置に砂漠がないと、気流の動きなどが現状としては整わないのです。ところが人間から見ると、砂漠は米ができないということで、いらない存在物だと言う人がいますが、砂漠が不要かどうかは今のところの科学でははっきりしません。もしかしたら地球上は全部畑と森林のような人間に役立つものだけで構成できるのかもしれませんが、それはまだ人間の科学は明らかにしていません。だから荒野や砂漠は人間から見て役に立たない土地であるという意味であって、それが地球全体の状態として不適正なものであるかどうかというのは、残念ながら科学ではまだ明らかになっていません。

竹村：村上先生、いかがですか。

お大師さまの「如来の知恵を見る」

村上：自然界の秩序とか原理とかいった意味のある命の繋がり、関係性が生命環境の意味だということをお大師さまの言葉で言わせていただきましたが、現代的に訳させていただくと魚であっても犬や猫であってもいいのですが、それらが網で繋がっているわけです。ネットワークで繋がっている。関係性というのは個と個の関係性です。存在と存在ですね。

それと武田先生の太陽光の話ですが、太陽光にしても風力にしても、基本的には大きな地球規模で見たら、人間のやっていることはちっぽけだということでしょう。逆に言えば、動物や植物が自然と共生し循環の世界、再生の世界をつくりだせたとしたら、それに負けない力を持っているということでしょう。だからお互いにやり過ぎたエゴイズムは絶対だめですが、ある程度のバランスの取れたエゴイズムは、主張してもいいと思うのです。

武田：その点での実績としては、日本の水力発電はだいたい3％ぐらいまで見かけはあまり影響は及ぼしませんでしたが、3％を超えますと急激にダムの自然破壊が問題になりました。ですから村上先生が今言われるように、どれぐらいまでならいいかということはあります。ただ太陽光発電や風力発電の議論を見ていますと、人間に都合がいいことは自然にもいいと言っているようで、そこは少し慎重に進めなければならないのではと思います。

村上：環境問題というのはエネルギー問題であり、エネルギーをどう獲得するかが新しい環境問題になっていくと思うのです。クリーンエネルギーとか再生エネルギーとか言っているのは、まやかしだと言われるかもしれませんが、エネルギーをどう獲得するかというと、できたらクリーンな方がいいでしょう。ところがそれはクリーンではないのですか。

武田：何をもってクリーンというかですが、今は人間の生活に困らないものをクリーンだと言っている。エネルギーをどうしたらいいのかというと、私の答えは簡単です。石炭をどんどん焚けばいい。まだ一万年分あります。CO_2が増えるから環境が良くなる。植物は原料がCO_2で、かつてそれが多かったから植物は非常に元気がよかった。今はもう0.04％になってしまって植物は生きるか死ぬかのぎりぎりなんです。われわれのご飯に相当するものが植物ではCO_2なんです。ですからCO_2を削減した方がいいと言うのは、完全に人間だけのことを考えた環境問題なので、いったい我々は何のために存在するんだということを議論しないと結論が得られないですが、私は1％ぐらいまでもっていった方がいいと思います。1％のペースで千年ぐらいいけば、だいたいは人間と植物、動物が共存できる快適な方向にいくのではないかと思っています。逆に現在のペースでCO_2を削減していきますと、あと5千万年後にすべての生物はいなくなります。生物は37億年ぐらい前に生まれたのですが、5千万年後にもう全部死んでしまってもいいという考えもいいかな、とも思うんですが、どっちがいいか科学者には判断できないです。

水力発電ですと、ナイル川の上流にアスワンダムを造ったことによって、ナイル川の水のエネルギーが減って海の水が入ってきたので、田畑が全部ダメになりました。しかし、それでもいいという考え方もあって、別に畑がなくなってもいいじゃないかと言われればそのと

おりです。今のCO_2削減というのは生物の絶滅を早める行動ですが、それでもいいか、ということになれば、これは宗教や仏教の方から答えを出していただかないと、逃げるわけではありませんがなかなか結論は難しい。今のところ科学者は、早く生物が絶滅したほうがいいということでやっております。それは確かです。

竹村：武田先生のご見解と他の科学者のご見解といろいろあって、我々はどちらが正しいかというのは分かりにくいところがあるわけですが、そういうさまざまな議論があるということは事実なのだろうと思います。

せっかく高野山で開かれている大会ですので、私の方から真言宗の村上先生にお聞きします。先ほどの資料に「空海の視点は自然の「言葉」（五大六塵であり、）それに如来の知恵を見ている」とありました。先生はここを自然観の原点としてお考えになったのだろうと思われますが、このことについてもう少しご説明いただけないでしょうか。

村上：「五大に響きあり、六塵に文字あり」という言葉が『声字実相義』というお大師さまの書物に出てくるのです。「五大」というのは、地、水、火、風、空です。宇宙であり、大自然を構成しているものですが、それぞれの音もそうですし、動きもそうだといいます。木が揺れている時に風が吹いている。風は見えないですが、木の葉が揺れ、風という現象を見ている。そうすると木の葉の揺れは、言葉として風が吹いているという表現になります。そういうありとあらゆる現象が言葉として我々に語りかけてくる、ということを言っておられます。

そして「六塵」というのは、五大を細かくした中でその話を出してきています。「六塵」は色、声、香、味、触、法ですが、分析しておられるのは色だけです。目に見えるもの、現象です。動きや形もあるものですから、それは言葉だと。三角形にしても四角形にしてもそうです。そういう理解の仕方をしておられるのです。ここで一番関係してくるのは、互いに依存し合っているという考え方です。人間と自然だったら、人間が主体で自然が客体・従という場合もあるし、自然が主体で人間が従という場合もある、互いに関係し合っているということだと思います。それが命の繋がりつまり、「互いに依存し合っている」存在の真理・智慧は、お大師さまの言葉から出てきています。

竹村：ありがとうございました。そろそろ時間もなくなってまいりました。本日は三人の先生方、貴重なご発表をまことにありがとうございました。

今日のシンポジウムで、私がつくづく感じたのは、大河内先生がいわれましたように、やはり現実に苦しみというものがあるわけです。これは地球社会のいたるところにあるわけでして、これを見据える、事実を見つめる。武田先生もよく言われますが、情報にとらわれずに、騙されずに事実を見つめる。そこから出発するということが非常に重要なことではないかということです。そうした中で、我々一人ひとり誰もが持っている貪・瞋・癡の問題、あるいはエゴイズムの問題というものを何とか克服していく。これはなかなか難しいことですが、そういう視点を持つということの中で、命の繋がりというものが見えてくるのではないかと思います。そうしたときに人間と人間の共生、あるいは人間と生物ないし自然との共生ということも実現する。そういう意味で、仏教の教えの中に、人間も自然も全て本来の命が十分に発揮されるような世界が実現していく道が存在していると言えるのではないかと思います。

先ほど主体性の問題、あるいは菩薩道というような言葉もありましたが、そういう主体的な実践の道を現代の状況の中で仏教からどのように打ち出していくのか。たとえば六波羅蜜や五戒といった、いろいろな実践の指針のようなものが仏教の中にあるわけですが、現代社会の中でそれらをどのように表現していくのか、ということが非常に重要なことではないかと思います。

ちょっとご紹介したいと思うのですが、ノルウエーのアルネ・ネスという方は、ディープ・エコロジーという、それこそ生命中心主義に立った一つの思想・哲学を展開されました。ネスは「ディープ・エコロジーとライフスタイル」という論文を書いており、そこにある環境問題にコミットする人の生き方の傾向についての記述は、人間の生き方として何が重要なのか、仏教徒として何が重要なのかということに関して非常に参考になると思われるのでご紹介したいと思います。全部で12あります。

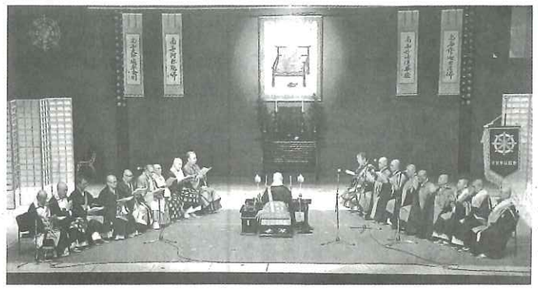
①質素な手段を用いる。
②反消費主義をとる。
③民族的・文化的な違いの価値を理解し、これを尊重する。
④欲望ではなく不可欠の必要を満たす努力をする。
⑤刺激の強い経験ではなく、深く豊かな経験を得ようとする。
⑥自然のなかで生きることを心がけ、利益社会ではなく共同社会の発展に努める。
⑦すべての生きものの真価を認め、これを尊重する。
⑧身近な生態系の保護に努める。
⑨人間が飼う動物と競合する野生生物を保護する。
⑩非暴力などに基づく行動をとる（同時に菜食主義に向かう）。
⑪第三世界、第四世界の状況を考え、自分の生活のあり方が貧困のなかで暮らす人々の生活に比べ、あまりにも高水準であまりにも違ったものにならないようにしようとする。ライフスタイルの地球規模の連帯をめざす。
⑫どこででも、だれにでも実現可能な生活のあり方の真価を理解し、これを尊重する。このようなライフスタイルとは、他の人々や人間以外の生きものに対しても、不正を働くことなく維持できる可能性を持つ生活のあり方である。（「ディープ・エコロジー運動の支持者に見られる傾向の指摘」、ネス「ディープ・エコロジーとライフスタイル」（1983）、アラン・ドレングソン・井上有一共編、井上有一監訳『ディープ・エコロジー―生き方から考える環境の思想』、昭和堂、2001年）

これはアルネ・ネスさんがディープ・エコロジーの追究、実践の中で考えられたことですが、仏教は仏教の中から現代人にとっての生き方の指針といったものを明確にして、そして共生ということの実現に向けて力を発揮していくということが求められているのではないかと思います。

時間になりましたので、これで本日のシンポジウムは閉じさせていただきます。どうもありがとうございました。

掲載紙から

和歌山・高野山大会開催の
模様は、全国紙や専門紙など
にも大きく取り上げられ、
紹介されました。



各宗派合同で行われた全体法要＝高野町

和歌山

宗派、教義超え高野山に一堂

仏教の各宗派が一堂に会し、宗派や教義を超えて話し合う「第42回全日本仏教徒会議」が16日、高野町高野山の高野山大学黎明館で始まり、合同法会や代議員会議、声明やご詠歌などが披露された。会議は17日まで開催される。

同会議は全国の仏教59宗派など計105団体でつくる全日本仏教会などの主催で2年に1度開かれており、高野山では昭和28年の第1回以来60年ぶり。

「宗教と環境―自然との共生」をテーマに、現代文明と人・自然がいかに調和し、次世代に継承していくかについて、宗教や信仰の観点から考える。

初日は合同法会「全日本仏教徒のつどい」が開かれ、浄土宗や高野山真言宗、日蓮宗など7宗派がそれぞれ読経やご詠歌などを披露し、全体法要も営まれた。信者らでつくる全日本仏教会コーラスグループ「世界平和の会」が「ともに生きる道を探り世界に発信したい」と述べた。

期間中は声明ライブや写経、瞑想の体験プログラムなども行われる。17日は武田邦彦・中部大教授による講演やシンポジウムが開かれる。

ニュースのご連絡は
和歌山支局
〒640―8154
和歌山市六番丁43
ハビネス六番丁ビル7F
073(422)1915
(422)1783
FAX073(435)3018

通信部・駐在
橋本　0736(32)0660
有田　0737(82)2391
御坊　0738(22)0822
田辺・白浜　0739(25)7208

産経新聞　2013年10月17日号

全国からの僧侶 信者 交流深める

仏教徒会議高野山大会

高野町の高野山大学で16日に開幕した「全日本仏教徒会議和歌山・高野山大会」（全日本仏教会、県仏教会など主催）では、各宗派のご詠歌や舞踊なども披露され、参加した僧侶や信者らが交流を深めていた。

開会式では、松長有慶・高野山真言宗管長が「私たちが社会や自然に対してどのように貢献できるかを考え、世界に向けて発信したい」と述べた。また、全日本仏教会会長の半田孝淳・天台座主が「自然の中で生きている喜びを分かち合い、真の豊かさとは何かを学び合おう」などと呼び掛けた。

この後、「全日本仏教徒のつどい」があり、様々な宗派の僧侶や信者らが「双盤念仏」「吉水流詠唱」「仏教讃歌」などを次々と披露。最後に17宗派による合同法会が営まれ、会場は厳かな読経に包まれていた。

和歌山市広原、主婦前田幸子さん(55)は「ご詠歌は不思議な魅力があり、聴いているうちに気持ちが落ち着いてきました」と笑みを浮かべて話していた。

ご詠歌などが披露された全日本仏教徒会議（高野町で）

読売新聞　2013年10月17日号

高野山で60年ぶり 仏教徒会議

東日本大震災 供養の法要も

全日本仏教徒会議の和歌山・高野山大会が16日、高野町の高野山大学黎明館で始まった。「宗教と環境―自然との共生」をテーマに、高野山真言宗と浄土宗など主要な宗派が参加した。高野山が会場になるのは、60年ぶり。

この日は、ステージで各宗派がそれぞれの歴史を紹介し、特色をもった念仏やご詠歌を披露。東日本大震災の犠牲者を供養する法要も営まれた。信者らでつくる女性コーラスグループ「仏教賛歌」が歌った。

17日には基調講演やシンポジウムがある。

東日本大震災の犠牲者を供養する僧侶ら＝高野町の高野山大学

朝日新聞　2013年10月17日号

高野山　千年の森で森林セラピー

第42回全日本仏教徒会議 充実した体験プログラム

神祇体験の感覚で入気があった大師要を巡るナイトツアー。暗闇より母天大塔をはじめとする伽藍が大きく浮かびあがって見え、その荘厳さに圧倒される

「宗教と環境―自然との共生」を大会テーマに掲げた第42回全日本仏教徒会議。参加者らは、会期中の数日、高野山の森林セラピーやフロラ・ファンが実施している各コースの中で、「森の音を聞く」「森の中で心を開く」「森の中で心を癒す」「森の中で心を研ぎ澄ます」の4つの森林セラピーを体験。「森の中で心を研ぎ澄ます」コースでは、参加者らは、目を閉じ、鳥のさえずりや、木々の葉が風に揺れる音などに耳を傾け、自然の中で心を研ぎ澄ませていた。

「森林セラピー」は、ドイツで開発された、自然の中で心を癒やす療法。森林の中を歩くだけで、ストレスが軽減されるなどの効果があるという。

森林セラピーは、参加者の目的に合わせて、森林セラピーロード、森林セラピーガイドツアーなどの中から、自分に合ったものを選ぶ。

「森林セラピーロード」は、高野山の中でも特殊な地形で、歴史と密接に結びついている。

「森林セラピーガイドツアー」は、専門ガイドが、参加者の人数に合わせ、森林セラピーロードの中から、自然とふれあう魅力があると思われるものを選んで、ツアーを組む

協賛団体一覧

曹洞宗
紀伊之国十三佛霊場
和歌山県仏教会
高野山住職会
高野山真言宗和歌山宗務支所
真言宗御室派 総本山仁和寺
真言宗大覚寺派宗務庁
日蓮宗宗務院
念法真教総本山小倉山金剛寺
天台宗
真言宗須磨寺派 大本山須磨寺
臨済宗妙心寺派
(一財)埼玉県佛教会
天台宗近畿教区和歌山部
西山浄土宗南部宗務支所
曹洞宗和歌山県宗務所
日蓮宗和歌山県宗務所
臨済宗妙心寺派和歌山教区
紀三井寺
浄土宗 護念山 稱名寺
西山浄土宗 檀林 総持寺
融通念佛宗 総本山大念佛寺
真言宗中山寺派 大本山中山寺
真言宗豊山派

真言宗智山派 総本山智積院
大阪府佛教会
愛知県仏教会
(公財)仏教伝道協会
天台宗 和歌山西国 花山院 浄福寺
新義真言宗 延命院
日蓮宗 蓮心寺
浄土宗 西岸寺
高野山真言宗 惣光寺
日蓮宗 本行院
浄土宗 踊躍山歓喜寺
日蓮宗 感應寺
浄土宗 永禅寺
曹洞宗 五百羅漢寺
那智山 青岸渡寺
浄土宗 廣原寺
西山浄土宗 明光寺
臨済宗 金龍寺
和歌山県青年僧の会
高野山真言宗 現福寺
念法眞教
浄土宗
浄土真宗本願寺派
真宗大谷派

臨済宗妙心寺派
茨城県仏教会
新潟県仏教会
鳥取県佛教連合会
(公社)全日本仏教婦人連盟
浄土真宗本願寺派 発願寺
浄土宗 龍泉寺
高野山真言宗 蓮台寺
浄土真宗本願寺派 鷺森別院
浄土真宗本願寺派 浄専寺
浄土宗 阿弥陀寺
日蓮宗 宣経寺
浄土眞宗本願寺派 玄通寺
浄土宗 紫雲山 極楽寺
浄土宗 専念寺
浄土宗 永正寺
浄土真宗本願寺派 西法寺
浄土真宗本願寺派 蓮光寺
浄土真宗本願寺派 万福寺
日蓮宗 本光寺
西山浄土宗 影臨寺
真言宗豊山派 西光寺
浄土宗 観音寺
浄土宗 専修寺

法華宗 久成寺
浄土真宗本願寺派 了賢寺
高野山真言宗 大日寺
浄土宗 西性寺
浄土真宗本願寺派 弘誓寺
真言宗御室派 高山寺
高野山真言宗 龍谷寺
高野山真言宗 観音寺
高野山真言宗 安楽寺
松生院
浄土真宗本願寺派 教願寺
浄土宗 西方寺
浄土宗 鐘林院
真言宗 圓藏院
浄土宗 無量光寺
西山浄土宗 稱念寺
浄土真宗本願寺派 西覚寺
高野山真言宗 正寿院
高野山真言宗 真明寺
浄土真宗本願寺派 西正寺
高野山真言宗 慈光円福院
高野山真言宗 現福寺
浄土宗 宝重寺
曹洞宗 法泉寺
浄土宗 西要寺

新義真言宗 泉福寺
浄土宗 正覚寺
真言宗 女人高野 帰命院
日蓮宗 妙宣寺
曹洞宗 南珠寺
浄土宗 万性寺
浄土宗 薬王寺
浄土宗 永楽寺
法華院 久成寺

メットライフ　アリコ
株式会社　方丈堂出版
花菱
中本名玉堂
全日本葬祭業協同組合連合会
株式会社　三輝
JR西日本
株式会社 JTB西日本 和歌山支店
(株)興和冠婚葬祭互育会
株式会社　安藤
有限会社　石原石材工業
株式会社　日吉屋
朱雀
株式会社　イシダ
(株)高野山出版社

太田屋式場
株式会社　メルシー
IMG(アイエムジィ)
東映
有限会社　高野
大和証券　和歌山支店
大阪レンタル
リコージャパン株式会社
株式会社　ウイング
香老舗　松榮堂
株式会社　高野山三光社
法衣匠　杉本
t.k.HANDEL ART
大和証券
南海電気鉄道株式会社
澤井壮平
大阪PR協会
株式会社　田平製作所(京仏具)
株式会社　井筒法衣店
株式会社　いせや
浜田屋
大和証券(株)和歌山支店
株式会社　大入

(順不同)

公益財団法人全日本仏教会役員一覧

【会　長】

半田　孝淳（天台座主）

【副会長】

横田　南嶺（臨済宗円覚寺派管長）
北河原公敬（東大寺長老）
萩野　映明（一般財団法人埼玉県佛教会会長）
前田　定戒（和歌山県仏教会会長）
宮林　昭彦（日韓仏教交流協議会会長）

【理事長】

小林　正道（浄土宗）

【評議員】

佐々木孝一（曹洞宗）
橘　正信（浄土真宗本願寺派）
齋藤　明聖（真宗大谷派）
里見　法雄（浄土宗）
渡邊　照敏（日蓮宗）
四之宮弘孝（高野山真言宗）
松井　宗益（臨済宗妙心寺派）
杜多　道雄（天台宗）
上杉　照延（真言宗智山派）
川田　聖戍（真言宗豊山派）

【理　事】

河村　松雄（曹洞宗）
池田　行信（浄土真宗本願寺派）
不破　仁（真宗大谷派）
駒野　教源（日蓮宗）
庄野　光昭（高野山真言宗）
松山　英照（臨済宗妙心寺派）
杜多　徳雄（天台宗）
近藤　昌俊（真言宗智山派）
粕谷　利通（真言宗豊山派）
森田　俊朗（和宗）
岡野　正純（孝道教団）
桶屋　良祐（念法眞教）
石堂　恵眼（真言宗中山寺派）
山田　一眞（東京都仏教連合会）
本間　孝康（神奈川県仏教会）
杉山　令憲（岐阜県仏教会）
吉田　教行（愛知県仏教会）
長澤　香静（京都仏教会）
竹田　空尊（京都府仏教連合会）

【監　事】

井桁　雄弘（大阪府佛教会）
古澤　勝浩（公益財団法人仏教伝道協会）
山中　一郎（公認会計士）

公益財団法人全日本仏教会加盟団体一覧

■加盟宗派（59）

天台宗
天台真盛宗
金峯山修験本宗
天台寺門宗
聖観音宗
和宗
孝道教団
妙見宗
念法眞教
高野山真言宗
真言宗智山派
真言宗豊山派
真言宗大覚寺派
新義真言宗
真言宗善通寺派
真言宗御室派
真言宗山階派
真言宗泉涌寺派
真言宗醍醐派
真言宗国分寺派
真言宗須磨寺派
真言宗中山寺派
真言三宝宗
信貴山真言宗
真言宗犬鳴派
東寺真言宗
浄土宗
浄土宗西山禅林寺派
浄土宗西山深草派
西山浄土宗
浄土真宗本願寺派
真宗大谷派
真宗高田派
真宗佛光寺派
真宗興正派
真宗木辺派
時宗
融通念佛宗
臨済宗妙心寺派
臨済宗南禅寺派
臨済宗円覚寺派
臨済宗建長寺派
臨済宗天龍寺派
臨済宗相国寺派
臨済宗東福寺派
曹洞宗
黄檗宗
日蓮宗
法華宗（本門流）
法華宗陣門流
法華宗真門流
顕本法華宗
本門佛立宗
本門法華宗
法相宗
聖徳宗
華厳宗
真言律宗
律宗

■都道府県仏教会（36）

北海道仏教会連盟
青森県仏教会
岩手県仏教会
福島県仏教会
茨城県仏教会
栃木県仏教会
群馬県仏教連合会
（一財）埼玉県佛教会
千葉県仏教会
東京都仏教連合会
神奈川県仏教会
新潟県仏教会
石川県仏教会
福井県仏教会
山梨県仏教会
長野県仏教会
岐阜県仏教会
静岡県仏教会
愛知県仏教会
滋賀県仏教会
京都仏教会
京都府仏教連合会
大阪府佛教会
兵庫県仏教会
和歌山県仏教会
鳥取県仏教連合会
島根県仏教会
岡山県佛教会
（一社）徳島県仏教会
香川県仏教会
愛媛県仏教会
高知県仏教会
福岡県仏教連合会
長崎県仏教連合会
宮崎県仏教連合会
沖縄県仏教会

■仏教団体（10）

（公社）全日本仏教婦人連盟
（公財）仏教伝道協会
（公社）日本仏教保育協会
（公財）国際仏教興隆協会
東京ブディストクラブ
全日本仏教青年会
日本仏教鑽仰会
（一社）仏教情報センター
日韓仏教交流協議会
（一社）在家仏教協会

第42回全日本仏教徒会議 和歌山・高野山大会実行委員一覧

【大会総裁】
半田　孝淳猊下(天台座主)
【大会副総裁】
横田　南嶺(臨済宗円覚寺派管長)
北河原公敬(華厳宗長老)
萩野　映明(財団法人埼玉県仏教協会会長)
前田　定戒(和歌山県仏教会会長)
宮林　昭彦(日韓仏教交流協議会会長)
小林　正道(浄土宗)
【大会会長】
松長　有慶猊下(高野山真言宗管長)
【実行委員長】
添田　隆昭(高野山真言宗宗務総長)
【実行副委員長】
柳瀬　智明
吉井　惠貫
【事務局長】
山口　文章
【事務局総括】
藪　　邦彦
【事務局総括補佐】
井上　幸彌
後藤　慈延
【総務部会部会長】
吉井　惠貫
【総務担当】
武内　龍雄
岩谷　杖忍
宮崎　龍祥
伊南　慈久
亀位　卓阿
齋藤　日譽
【財務部会部会長】
廣瀬　義仙
【財務担当】
長谷川真浄
大谷　重雄
中村　浩子

【広報担当】
赤堀　暢泰
稲葉　滋順
後藤　慈延
【企画・式典部会長】
〈部 会 長〉小籔　実英
〈副部会長〉萩山　祥光
【企画・式典担当】
井本　大雅
織田　康隆
高岡　隆真
滝山　隆心
山澤　一心
【法会担当】
内海　周浩
【記念品担当】
島　　悦男
原田　聖士
中尾　修也
中野　希美
南　　学
【全日本仏教会　事務総局】
関崎　幸孝(事務総長)
奈良　慈徹(総務部長)
東田　樹治(総務部次長)
山崎美由紀(総務部主事)
久喜　和裕(財務部長)
小山　智恵(財務部主事)
大辻　隆善(社会人権部長)
田代　弘尚(社会人権部次長)
西野　良嘉(社会人権部次長)
加久保範祐(広報文化部長)
中村　　甲(広報文化部次長)
鈴川　智信(国際部長)
藤田　宗玄(国際部次長)
酒井　仁成(嘱託)
関西支局

第42回全日本仏教徒会議 和歌山・高野山大会紀要

宗教と環境

自然との共生

発行日：2014年4月16日
発　行：高野山真言宗 総本山 金剛峯寺
〒648-0294
和歌山県伊都郡高野町高野山132
TEL 0736-56-2011
編　集：和歌山県仏教会
高野山真言宗
公益財団法人全日本仏教会
制　作：株式会社ウイング
〒640-8411
和歌山県和歌山市梶取17-2
TEL 073-453-5700